



TITLE:

<書評> 箭内 匡著 『イメージの人類学』 せりか書房、2018年、定価3,000円+税、313頁

AUTHOR(S):

田中, 瑠莉

CITATION:

田中, 瑠莉. <書評> 箭内 匡著 『イメージの人類学』 せりか書房、2018年、定価3,000円+税、313頁. コンタクト・ゾーン 2019, 11(2019): 512-517

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244006>

RIGHT:

箭内 匡著

『イメージの人類学』

せりか書房、2018年、定価3,000円＋税、313頁

田中瑠莉*

本書は、イメージという概念のもとに人類学的研究に通底している事項を整理し、ひとつの学問としての基盤を整える作業ということができるだろう。そのために、人類学を形成してきた文化と社会という主役を「引き算」し、イメージという新たな理論的枠組みのもとで、人類学を根底から組み直すことを目指す。この、無謀とも思えるような試みは、著者の1990年代以降の暗中模索の総括として編まれており、人類学という学問が直面してきた様々な問題への著者の回答が含まれている。

では、なぜ著者は文化・社会という人類学の根幹を支えてきた概念を取り払う必要があったのだろうか。文化・社会は、民族という言葉と共に20世紀人類学の特徴を明確に示すものであった。なぜならば、人類学者がフィールドで出会う「あたかも異民族であるような人々」の生活について、社会と文化により枠を設け全体を捉えることを試みることで、人類学的な研究対象と方法を確立してきたからである。しかし、1990年代以降、冷戦の終結や目覚ましい技術革新、その結果としてのグローバリゼーションに代表されるような社会状況の変化により、以前のような全体論的な視座の成立は困難になった。文化や社会という普遍のように思われる概念は、実は20世紀特有のものだったのではないだろうか。このような直感のもとに、著者はイメージという新しい理論装置を構成していくのである。そのため、イメージの人類学は文化・社会人類学と断絶するものではない。古典的議論から現代的な研究までをイメージという概念のもとに読み直し、これからの人類学のあり方にひとつの方向性を提示するものである。

著者によると、本書には以上で述べてきた人類学を根底から組み直すという大目的の他にも2つほど目的が盛り込まれているが、それらは本書のユニークな特徴となっている。1つ目は、「イメージの人類学」を「イメージについての人類学」と「イメージによる人類学」という2つの方向性から用いている点である。理論枠組みとしてのイメージだけでなく、著者の長年の関心から映像や画像、文学表現といった方法論の拡張が理論的な問題と複雑に絡み合うようにして吟味される。2つ目は、著者のジル・ドゥルーズ、アンリ・ベルクソン、スピノザのイメージ哲学をめぐる反芻の帰結のもとに、本書を人類学と哲学

*TANAKA Ruri 京都大学大学院 人間・環境学研究科

のあいだで綴ることである。以上の目的も含めて、著者は本書を人類学以外の領域にも開かれたものとしており、読者に人類学の専門的な知識を要求しない入門書としても読めるように執筆している。そのため、決して易しい内容ではないが、全体における議論の展開や引用も丁寧であり、予備知識がなくても読者に人類学のエッセンスを感じてもらうことが可能だろう。それと同時に、人類学の領域に縛られない多岐に渡る引用は、人類学を学ぶ者の視野を外部の領域に開くものでもある。著者の思考を辿るようにして、一種の読書案内のように本書を読むことも可能だろう。

さて、本書評では、人類学の理論的装置を組み立てるという本書の目標に沿うよう、理論的な概略を中心に本書の内容を整理することを試みる。前述したように、本書は具体的かつ丁寧な展開が大きな特徴となっているため、理論的な側面に重点を置くような要約では、本書の魅力を三分の一も伝えることができないだろう。しかし、本書は著者の思索と共に読み進める中で、情景の全体像が少しずつ提示されていく（哲学書を思わせる）ような構成であるため、紙幅の関係上すべての要素をすくい上げることは難しい。そこで、本書評では読解の補助となることを目指し、実際に本書を手にとっていただく契機となれば幸いである。

目次は以下の通りである。

はじめに——人類学の変貌

第1章 イメージの人類学に向かって

第2章 民族誌的フィールドワーク——原点としてのマリノフスキ

第3章 民族誌的フィールドワーク（続）——転換期の一事例

第4章 イメージ経験の多層性

第5章 社会身体を生きること

第6章 自然のなかの人間

第7章 アナロジーと自然の政治

第8章 近代性をめぐる人類学

第9章 自然と身体の現在へ

おわりに

本書は、第5章までの前半と第6章からの後半に大きく分けることができる。

前半では、「イメージ」と「社会身体」という概念のもとに、理論的な枠組みを整えることが主眼となる。著者は、イメージの人類学を古典的な議論との連続の中に位置づけるために、人類学の中心に据えられてきたのは文化や社会ではなく「他なる」ものへの関心であると指摘する。20世紀の人類学の文化相対主義的なラディカルさは、「他なる」生の可能性や正当性を、近代国家とその法制度の枠からも自由な思考の地平において想像することにあった。この観点を現代的状況へと継承し、「微視的なものと巨視的なもの、止まっているものと動いているもの、瞬間的なものと持続的なもの、言葉と言葉で表現されないもの、といった幅の中で対象を捉え」（p.21）ることを目指した理論枠組みが「イメー

ジ」である。

本書におけるイメージという概念は、一般的な用法よりもはるかに広い意味で用いられるが、一言で定義すると、イメージとは「あらゆる X に対する現れのことである」(p.23)。X とは人間だけでなく人間以外の生物や物を含み、個人でなく集団（あるいは集合）にも当てはまる。加えて、イメージを現れと捉えた際、イメージには視覚以外の様々な感覚によって生じる経験や知覚も含まれる。

このような、汎用的なイメージ概念を人類学的考察の対象とするために導入されるのが、「イメージ平面」、「脱イメージ化」、「再イメージ化」、という概念セットである。「イメージ平面」とは、経験がイメージとして特定の方法で現れる場のようなものである。「脱イメージ化」とは、あるイメージが特定のイメージ平面から別のイメージ平面へと向かう途中で、イメージの内容が切り捨てられ抽象化される過程である。そして、抽象化されたイメージは、新たなイメージ平面において異なる複数のイメージと組み合わせられ、新たなイメージとして再び現れる。これが「再イメージ化」である。脱イメージ化と再イメージ化はひとまとまりのプロセスであり、それゆえ本書では、二つの過程を合わせる形で、「脱+再イメージ化」（あるいは「イメージ化」）という表現が用いられる。

脱+再イメージ化の概念セットは、従来の象徴体系に関する議論などとは異なり、イメージが本来的に多層的で様々な形に転生していく状況を思考可能にする。こうした、イメージの転生は、第一のイメージ平面から第二のイメージ平面への移動だけでなく、第二のイメージ平面からもう一度、第一のイメージ平面へと戻っていく可能性を秘めている。本書ではそれを「再イメージ化の照り返し」と読んでいる。例えば、第一のイメージ平面において自然の事物として認識される対象が、イメージ化のプロセスを経て第二のイメージ平面において象徴として理解されたとしよう。しかし、そのイメージは象徴として理解されて終わるとは限らない。象徴として抽象化されたイメージが、日々の営みの中で人々が対面する自然の事物へとイメージ化され、再び具体性を獲得する可能性も秘められている。「脱+再イメージ化」は、「イメージ経験が私の前にある事物の客観的ないし主観的な把握に留まるのではなく、私の身体が生きる過程の全体と実効的に連関してゆくものであることを示す動態的な概念」(p.29)なのである。

イメージ概念が人類学的研究にもたらす視座を整理すると、次の2点を挙げることができる。1つ目に、事物や感覚などあらゆるものを含むイメージとしての現れが、動態の中で生じることを前提とする理論的な視座である。これにより、人々の生は、ただ固定的な枠組みを反覆するものでもなく、周囲の環境を認識するに留まるものでもなく、様々な（人間を含めた）事物との関係やその変化の中で把握し（それに対応する形で）動くもの、へと位置づけ直される。加えて、単に動態の中で人々の生を捉えることが可能となるだけでなく、固定的な時空間の枠組みの中で現象が生起するという西欧的な認識論を疑い、時間・空間の変化と共にイメージの現れを問い直すことにも繋がる。

2つ目に、イメージ化における身体的重要性についてである。著者は第2章において人類学の古典であるブロニスワフ・マリノフスキの『西太平洋の遠洋航海者』を引用し、人類学の調査法について議論を展開していく。序論で提示される参与観察という方法論が

フィールドワークのマニフェストとされながら、その理論的な裏付けとなる「現実の生の不可量部分」という概念が長らく等閑視されてきたことを指摘する。この不可量部分こそがイメージにあたるものであり、人類学者がフィールドの人々と時間・空間を共にすることで身体経験を通じて獲得することを目指すものである。不可量部分を体得することは、「私」（調査者個人）の身体が、フィールドの人々とイメージを共有するような「我々」の身体へと変容していく過程でもある。このような、個人性を超えた身体のあり方を、本書では「社会身体」としている。社会身体とは、「様々な度合いの求心力・遠心力をはらんだ身体・物質の社会的集まり」（p.109）と定義され、イメージ平面がその上で展開するような力の場に位置づけられる。つまり、社会身体は集会的なものであると同時に、（その集合を形成するという意味において）個人的なものでもあり、個人が複数の社会身体を持つことも可能である。

以上の概念をもとに、20世紀以来行われてきた人類学的な研究が何であったかを改めて考えると、次のようになるだろう。イメージが連関する中で生じる社会身体がどのように存在しているのかについて自らの身体を通じて経験し、その存在様式に関する記述と考察を積み重ねることである。この観点から、人類学者が研究成果として創出してきた民族誌の意義についても考え直すことが可能だろう。民族誌とは、単にフィールドでの経験を言語化することによって、人類学のイメージ平面へと還元するようなものではない。そもそも、言葉自体が、自己の内外を繋いだり、あるいは事物そのものを多様な印象や経験の可能性と結びつけるような、イメージ平面を複層化させる働きを有している。人類学者が調査地におけるイメージや社会身体と向き合いながら、その場において適切な表現を探すことにより、民族誌的記述のイメージ平面は、現地の社会身体と時にせめぎ合いながらも接続する可能性を有しているのである。

第6章以降の後半では、イメージと社会身体の理論枠組みのもとに、近年の自然や身体の人類学と古典的な議論を連続させていくような試みがなされる。具体的には、イメージを自然のもつ「力」（人間を含めたあらゆる現れの根源としての自然）と解釈し、力との関係性をアニミズム、デュナミズム、アナロジスム、客体化された自然の4つに分類する。それぞれ簡潔に述べると、アニミズムは複数のイメージ平面が競合し合うような遠心力を持つ関係である。デュナミズムは、力をそれそのものとして受け止めるようなものである。アナロジスムは、多様な現れを1つのイメージのもとに取りまとめていくような、求心性を持った関係である。客体化された自然は、具体的には近代的な科学によって体系立てられた自然観のことを指すが、これはアナロジスムの延長に登場したものである。特に、メディアの出現や観察、記録の集約との関連の中で考察が展開される。

本文では、それぞれのイメージ（＝自然＝力）との関係性が、人々の生や社会身体の形成においてどのような特徴を持ちうるのかについて、その政治・経済的な帰結について考察が進められていく。本書における4つの分類は、フィリップ・デスコラの議論へのオマージュであるが、本来の解釈とは大きく異なっている点にも留意する必要がある。デスコラの自然の分類が相互に排他的な存在論の様相を呈するのに対して、著者は相互に浸透的で可変的なモデルとしてこれらを提唱している。このように捉え直すことで、古典的な

民族誌の事例と極めて現代的な事例の連続性が明らかとなる。加えて、アニミズムとアナロジスムといった非近代的な社会・文化を明らかにするために用いられてきた関係性が、客体化された（科学的な）自然観が優位にあると思われる現代においても、時と場合によって現れることが示される。つまり、古典的な議論の題材を相互浸透的で動態的なイメージ概念のもとに捉え直していくことにより、可変性や境界、ヴァリエーションといった従来の〈文化〉や〈社会〉概念が抱えてきた課題や、近代科学の独自性などが読み替えられる契機となるのである。

以上の洞察から、客体化された「自然」観の優位性が際立つ近代における、人類学的なフィールドワークのあり方について考察が展開される。客体化によってもたらされる確定された知識と、実際に自分の身体が経験することのズレ（＝経験の二重性）に焦点があてられ、客体化された「自然」が支配的な地位にあるようなイメージ平面と個々人の経験に根ざす身体的なイメージ経験を結びあわせるような人類学について構想が進められる。

第9章では、古典的な民族誌には当てはまらないような現代的なフィールドワークの展望について、具体的な民族誌を例に出しながら次の3つの問題が検討される。1つ目は古典的な議論において〈社会〉や〈文化〉の背景と化してきた〈自然〉と〈身体〉について、2つ目はフィールドの境界の曖昧さについて、3つ目は一回的なものと反復的なものについてである。これらの問題は、マクロな次元でもミクロな意味においても常に変化のもとにある現代において、人々の生の不可量部分とは何かという命題に繋がっている。現代において生の不可量部分は、マリノフスキが想定していた素朴な身体的枠組みの中には存在せず、人々の生を取り囲む（非人間的な存在を含めた）ネットワーク的なものを通じて拡散してしまったのではないか、という疑問が著者により提示される。つまり、身体と（その周囲を取り囲む）自然との関係を考察することが、社会的身体のあり方を捉えるために不可欠なのである。

「おわりに」では、後半で展開してきた議論の関係性が整理され、時間性について考察がなされていく。自然あるいは人間の外部に存在する力へのイメージとして用いられてきた4つの分類が時間軸へと展開され、未来というものに対する態度として読み替えられる。加えて、常に変化のもとにある現代においてはイメージの一回性が強調されるが、それは古典的な議論がベースとしてきたイメージの反復と相反するものではないことが論じられる。「一回的でありかつ反復的である」という思想は、生についての考察の原点にあるべきものであり、人々の生のあり方を捉えるイメージの人類学が踏襲するものでもある。

さて、端的に言えば、イメージの人類学は最大限に拡張された包括的な理論枠組みであり、一つのイメージ平面へと過去、現在、そしてこれからの人類学を方向づけることを試みたものと評することができる。文化・社会が人間によって造り出されたものであり、そのために人々の生のあり方について知るための対象とされてきたのであれば、イメージという概念はもう一段抽象度の高い視点から人々の生を捉えるような試みである。つまり、人々が生きている過程そのものを捉えるような試みである。著者は文化・社会の総体に代わり、人々の経験の全体を捉えることをイメージの人類学で目指している。複雑で可

変的でまとまりのない対象をありのままに捉えることを試みる視点は、今後の研究を形成する指針を示すものでもある。

イメージの人類学を方法論として見たときに興味深いのは、映像や画像など手法の拡張だけでなく、メタ学問的な次元においても調査手法のあり方を転換する可能性を有している点である。本書のイメージ概念は、人類学的な研究対象、あるいはあらゆるもの、を対象化する分析ツールであると同時に、人類学の研究そのものを「脱+再イメージ化」のプロセスへと位置づける。イメージの人類学は、人類学という学問的な活動と人々の生そのものを相似の過程として扱うものとして読み取ることも可能とするのではないだろうか。人々の生の「不可量部分」を明らかにするために、調査者は長期のフィールドワークを行い、時間・空間を調査地の人々と共にし、その経験をもとに研究成果を提出する。人類学的な研究成果は、イメージ化されたフィールドの現れであり、調査者自身の人生の一部であり、学問に携わる様々な人々との関わりの中で位置づけられるものであり、同時にフィールドで調査に関わった人々の生と共有されるものでもある。人類学をイメージ化の過程として捉える視点は、私達がどのようにしてイメージと向き合っているのかを反省的に捉えることも可能とするだろう。

また、本書における著者の試みは、近年の哲学的な議論を含んだ人類学の傾向を含むものである。人類学と哲学の境界で書かれ、人類学の外縁を描いていくような本書は、人類学が何をどこまで議論すべきかを暗示するものではないだろうか。人間を含めた、関係によって多様な現れをもつ存在をどのように議論に組み込むことが可能となるのか。人々の生において人間以外の存在が不可欠であることは、度々指摘されてきた。では、人々の生に含まれる多様な存在をどのように扱い、どこまでを人類学的な研究対象として扱うべきなのか。イメージの概念は、人類学の対象を拡張する中で、(現時点における)その外縁を描写するものでもあるだろう。

本書は、社会的状況だけでなく、調査者や非調査者の関係、学問の領域など、あらゆる境界が曖昧となる時代における人類学のマニフェスト的著作である。